釧新郷土芸術賞に輝く

〈2〉

受賞者の横顔

◇皮革染色

金沢初代さん

染めとの出会いは学生時代

"染め"との出会いは二十年以上前、多摩美術大学に通っていたころのこと。図案科でデザインを学んでいたが、ある日、白い布いっぱいのデザインに大きなハケで体ごと打ち込んで色づけしている姿を見てから染色に魅せられ、現在、無形文化財になっている芹沢鮮介さんの工房で本格的に染色に取り組んだ。

始めは布染めで、三十年に大学卒業と同時に釧路で初の展示会を開いた。「染色は洋服、クッション、のれんなど立体的に見られるものを楽しくします」という金沢さんは以来十年ほど布染めに専念した。しかし、冬の長い北海道では天候に左右される布染めは適さず、家庭で気軽にできる実用的な皮染めを手がけるようになった。

日本独特のろうけつ染めを取り入れた皮染めは、展示会で好評を得たが、とくに四十九年、横浜での展示会は鮮やかな色彩が多くの人たちに感動を与えた。

横浜での展示会で感動呼ぶ

ろうけつ染めはろうをかけたところだけ皮がそのままの状態で残り、色が鮮やかに浮かび出す。皮の特性を生かした技法は見る人を魅きつけ、習う人もふえている。作品はこれまでコート、インテリア(テーブル、イス、タンス、壁面装飾)など生活の中に使われるものすべてを手がけているが「デザインから色づけまで最低二カ月気が乗らず長ければ一年がかかりという仕事でなかなか作品が増えない」というから大変根気のいる仕事だ。

皮染めもほかにカッターを使って立体感を出すものや、スタンピングなどの技法があるが「多くの色が使え、見る人が退屈せず飽きないろうけつ染めを続ける」という。また、筆のかわりにタワシを使うなど新しい技法を取り入れ、多くの色を使いながらも回りとつり合いのとれた作品作りにーと意欲を燃やす。

図案の基本も役立てて

「まだまだ満足のいく作品がなく、芸術賞受賞などおこがましい。奥の深いろうけつ染めで皮の可能性をためしたい」と研究心は旺盛だ。

現在、道教大釧路分校の講師として図案を教えているが、皮染めにも図案の基本は大いに役立てている。日本工芸家協会会員、四十四歳。

彩り、家の中が楽しく

皮の可能性に情熱注ぐ

皮の可能性をためしたいー作品の前に立つ金沢さん